

タイトル	真淵と宣長
著者	小野寺, 静子; ONODERA, seiko
引用	年報新入文学, 9: 2-5
発行日	2012-12-20

真淵と宣長

小野寺 静子

賀茂真淵の『冠辞考』を読んだ本居宣長は、真淵の研究の深さを認識し敬慕の念を抱く。が、松阪に住む宣長と江戸に住む真淵と逢うことはかなわず、直接教えを受ける機会はなかった。宝暦一三年（一七六三）二月、真淵が田安宗武の命により大和・山城を訪れた復路の五月二五日、宣長は真淵の旅宿、新上屋を訪れ真淵と逢う。生涯に一度だけの二人の懇談であった。この時真淵六七歳、宣長三四歳、真淵はその六年後没する。その年の二月二八日、宣長は真淵の入門許諾を知らせる村田伝蔵の書状を受け取り、翌明和元年（一七六四）一月、真淵に誓紙を届け正式に県門の一人となる。以降、宣長は書簡によつて真淵の教えをうけることになる。古事記の注釈を書きたいと思つていた宣長はそのことを真淵に伝えると、真淵は「古言を得たるうへならではあたはず、万葉をよく明らむるにこそあれ」（『玉勝間』）という自説にそつて、まず万葉集を明らかにすることを教え諭した。その教えによつて宣長は万葉集の研究に勤しみ、やがて三二年の歳月をかけて『古事記傳』を完成させる。『古事記傳』は現在でも古事記研究上必見の書である。

平成二二年一二月、私ははじめて松阪を訪れ、宣長ゆかりの地を探索した。宣長の家は松坂公園内の本居宣長記念館の近くに移され保存されていた。宣長は医者を生業としながら研究に励んだのであるから、この家で医者として病人を受け入れ、家族を養い、教えを乞い訪れる人々に講義を行い、古事記、源氏物語などの古典研究や歌道、古道についての書を著していたのかと思うと感慨深いものがあつた。三四歳で敬愛する真淵を師とし、教えに従い万葉集の研究に励み、書簡で具体的な教えをうけるという状況を宣長は至上の喜びとして研究に打ち込んだにちがいない。真淵もまた、出色の弟子を得、教えることに張り合いを持ったにちがいない。

伝説的な松阪の一夜によつて県門の一人となりえた宣長を思い、私は二人の深く結びついた師弟関係に想像をめぐらせていたが、記念館に展示されていた真淵からのある書簡の激しい調子に驚いた。そのことがずつと気がかりであつたが、その書簡はどのようなものか確かめることもなく過ぎてきた。

今年の九月、再び本居宣長記念館を訪れ、このことについて館長・吉田悦之氏からご教示いただくことができた。その書簡は明和三年（一七六六）九月一六日付けのもので、記念館所蔵ではないので私が最初に訪れたころ期間限定で展示されていたものであることもわかつた。

宣長宛の書簡は「来簡集」として『本居宣長全集』別巻三（筑摩書房、平成五年九月）に収められている。改めてその書簡を確認して私は次の部分に衝撃を受けたのであつたことがわかつた。

詠歌の事よろしからず候、既にたび／＼いへる如く、短歌は巧みなるはいやしといふは、よき歌の上にてても、言よろしく心高く調子を得たるは、少しも巧みの無ぞよき也、それにむかへてはよき歌

といへど巧み有はいやしき也、まして風姿にも意の雅俗にもかゝはらで、只奇言薄切の意をいへるは惣て論にもたらぬ事也、

短歌は技巧に走っているのは取るに足りない、よい歌であっても同様で奇抜なことは、薄っぺらい心を歌うのは論ずるにたりない、という真淵の歌に対する考えを明確に示すものであった。

真淵も宣長も歌人でもあった。宣長はすでに一九歳から二二歳にかけて詠じた歌を宝暦元年（一七五一）に『栄貞詠草』として出しているし、宝暦八、九年ころには『排蘆小船』^{あしわけをぶね}で、歌とは何か、何故歌を詠むのかという和歌の根本的な問題に對峙し、どのような歌を詠むべきかを示している。宣長の詠歌の姿勢は中古の和歌の風雅さを重んじるものであった。一方、真淵は上古風をよしとする考えで、どのような歌をめざすかについてはすでに二人には相容れないものがあつた。

またこの書簡中には、

いはばいまだ万葉其外の古書の事は知給はで異見を立らるゝこそ不審なれ、か様の御志に候はば向後小子に御問も無用の事也、……惣て信じ給はぬ氣頭はなれば、是までのごとく答は為まじき也、しか御心得候へ、

ともある。真淵の「万葉撰者巻の次第」についての見解は独特のものである。それはあまたの研究の結果という自負を持つから、異見を述べられるとそのような志でいるならばこれ以降私への質問は無用で

ある、……信じない気がみえたら、これまでのように答えることはあるまい、そのように心得よ、と激しい言葉を発することになる。こうした激しさは真淵の宣長への期待の大きさでもあり、宣長に自説が理解されない無念さのあらわれでもある。

何を受け継ぎ、何を引き渡すのか、これは私たちの課題でもある。宣長は自分の詠歌や研究の姿勢は妥協しなかったけれど、真淵の学問の姿勢を学び古事記の世界観、源氏物語「もののあはれ」論など、現代の私たちに問題提起をし続けている。

(おのづから せいこ・北海学園大学大学院教授)

